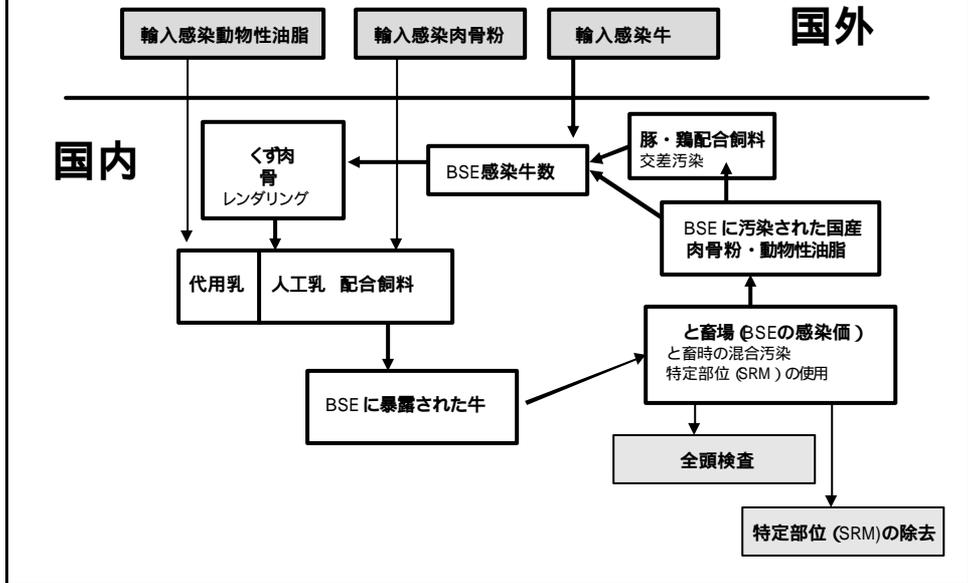


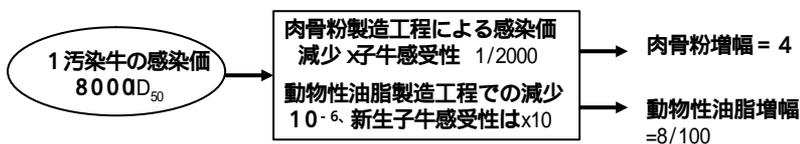
BSEリスク・シナリオ

日本の牛のBSE汚染チャート



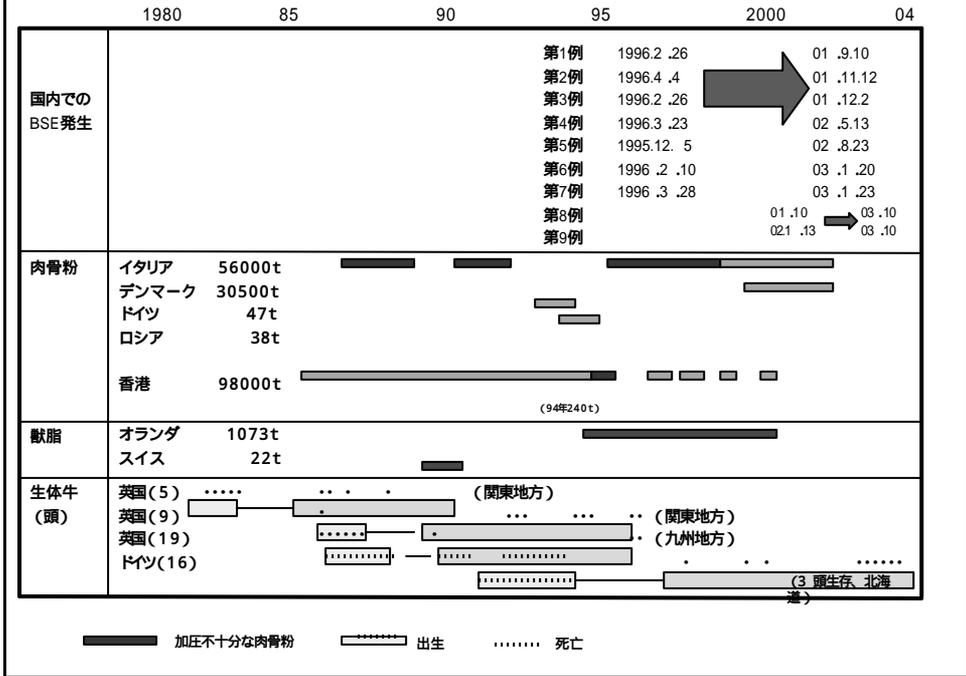
BSE牛の感染価の考え方

- 1、生体牛、肉骨粉、動物性油脂いずれも牛に還元
(牛1頭 = 65kg肉骨粉、59 kg動物性油脂)
- 2、1発症牛の群は平均 4頭の汚染牛 (係数は 3~ 6)
- 3、1汚染生牛の肉骨粉による増幅は 3~ 6倍 (平均 4倍)
- 4、動物性油脂製造工程の感染価減少 10^{-6}
新生牛の感受性補正は子牛の $\times 10$ 倍
(増幅は 8/100 倍、係数は 6/100 ~ 12/100 倍)

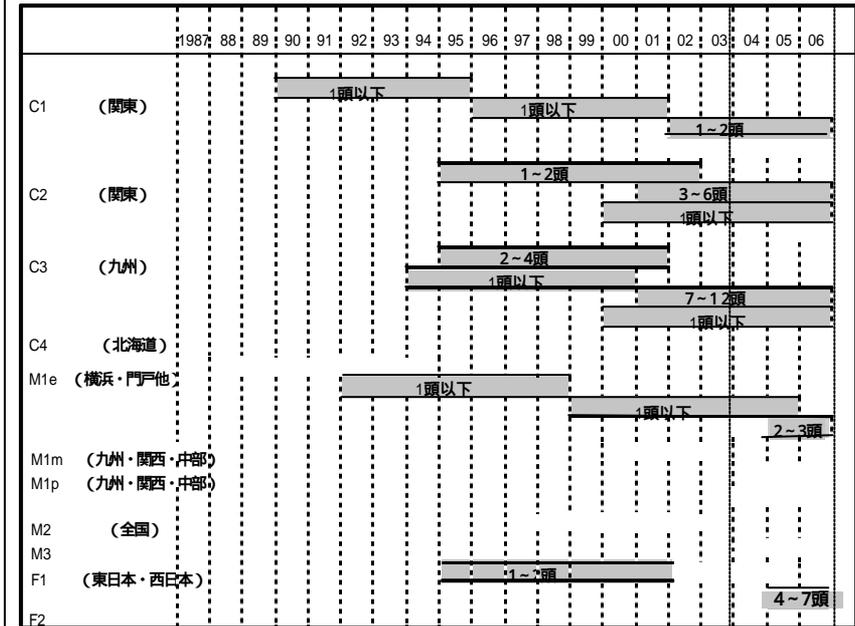


- 5、発生規模と発生確率は分離して処理

事実経過

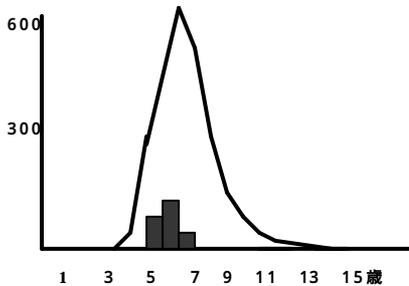


時系列発症シナリオ(予測)



検証に基づく推定 (日本の汚染規模)

年齢別BSE陽性牛
EUモデル 2001年
(総計 1817頭)



年齢 (歳)	検査陽性頭数	死亡牛の陽性推計
2歳以下	(2)	
3		
4		1?
5	3	4.5?
6	4	6?
7	1(3?)	1(5?)
8	(3?)	4.5?
9	(2?)	3?
10歳以上	(2?)	3?

1995, 96年生まれ汚染ロット
2001年10月から出てくるものは廃棄、再利用なし
2001年の禁止以前にレンダリングに回ったもの12頭?
12×10000ID50、肉骨粉での感染価低減(1/100)
1200ID50、1歳以下の乳牛の摂取5%として60ID50
国産牛での2回転シナリオ: 2005, 06年頃から60頭
30ヶ月以上での陽性30頭弱?

原因解明と予測

- 1) EUの高汚染国は物流、経済圏のポータレス化により、定常的にBSE汚染を受けた可能性
この条件からはずれる日本では、BSE汚染は小規模・不連続的に起こった可能性
- 2) 英国からの生体牛、アジアからの肉骨粉再輸入、EUからの動物性油脂、EUからの肉骨粉
と国内でのレンダリングによる増幅が考えられる
- 3) 農水省により、陽性牛を中心とした川上と川下調査がされた。
陽性牛は出生日が非常に近く、東日本に分布している。
汚染源が広汎に行き渡っていない。
- 4) 汚染経路の可能性は複数考えられる。1998年までのイタリアからの肉骨粉のロットや2001年の
BSE汚染牛がレンダリングに回っていると、95,96年とは別ロットによるBSE陽性牛がこれから
(平均5年の潜伏期として2003年~2006年)検出される。
8例目と例目(01,02年生まれ)が出てしまった。
- 5) BSE陽性牛は屠場検査で見つかる数の、1.5倍ほどが異常・死亡牛で見つかる可能性が高い
死亡牛全頭検査により、原因究明が進むことが期待される。

暫定清浄国宣言をするのに最終発症牛から年間検査を継続し、
陰性を確認する必要がある。2015年頃まで検査が必要な長丁場になる。